令和五年度

第六十九回青少年読書感想文コンクール

札幌市読書感想文コンクール

受賞作品集

小学校・中学校・高等学校

札幌市学校図書館協議会

後援・協賛

札幌市
札幌市議会
札幌市教育委員会
札幌市ＰＴＡ協議会
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部
㈱光陽社
キハラ㈱北海道営業所
教育出版㈱　北海道支社
㈱北海教育評論社
㈱図書館ネットワークサービス
光村図書出版㈱北海道支社
㈱毎日新聞社　北海道支社
一般財団法人　札幌市教育協会
㈱平和堂
㈱清水書院　札幌営業所
東京書籍㈱　北海道支社
㈲新妻商事

目　次

札幌市長賞　ラブカは静かに弓を持つ　札幌光星高等学校　３年　野崎　幸子

札幌市議会議長賞　思い出は宝物　札幌市立北野台小学校　５年　森永　萌々夏

札幌市教育長賞　『ワタシゴト　１４歳のひろしま』から平和維持を考える　札幌市立平岡緑中学校　１年　松本　萌杏

（特別賞）札幌市学校図書館協議会会長賞　「また、同じ夢を見ていた」を読んで　札幌聖心女子学院高等学校　３年　谷口　まる

（特別賞）札幌市学校図書館協議会会長賞　だいじないのち　札幌市立新川中央小学校　２年　山田　朝陽

（特別賞）札幌市学校図書館協議会会長賞　多角的にとらえることが世界をカラフルにする　藤女子中学校　２年　田中　結衣

（特別賞）札幌市ＰＴＡ協議会会長賞　生きるということ―『夜と霧』を読んで―　札幌聖心女子学院高等学校　３年　西　恵里奈

（特別賞）札幌市ＰＴＡ協議会会長賞　とびきりの笑顔がみたいから　札幌市立厚別北小学校　３年　鈴木　快都

（特別賞）札幌市ＰＴＡ協議会会長賞　「将来の夢は何ですか？」　藤女子中学校　２年　賀澤　聖菜

（特別賞）北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞　誰もが生きる意味を理解せず、命の短さをなげくのでしょう　市立札幌啓北商業高等学校　２年　齋藤　千奈美

（特別賞）光陽社賞　平和をつくるには　札幌市立西宮の沢小学校　６年　板倉　悠起

（特別賞）キハラ賞　へいわとせんそう　藤女子中学校　１年　前田　海音

（特別賞）教育出版賞　小松菜はてき　札幌市立日新小学校　３年　小林　初心

（特別賞）北海教育評論社賞　声なき慟哭　北嶺高等学校　１年　前田　海杜

（特別賞）図書館ネットワークサービス賞　ぼくは、ぼく　札幌市立平岡公園小学校　２年　井川　眞宏

（特別賞）図書館ネットワークサービス賞　「エーミールと探偵たち」から学んだこと　札幌市立向陵中学校　２年　鷹見　友貴

（特別賞）光村図書出版賞　これからの決意　札幌市立信濃中学校　２年　坂本　温音

審　査

審査基準

○　内容や主題を的確に把握し、自分の考えたことや感じたことを素直に書いているか。

○　身近な問題と結びつけて考え、読み手の生活がにじみ出るように書いているか。

○　表現に工夫のあとが見られるか。（論旨・構想・表現・表記など）具体的な観点として、次の七点がある。

①　作品を十分に読み込んでいるか。

②　作品から受けた感動・発見・喜びなど読み手の心情が表現されているか。

③　読み手の独特の受け取りが学年相応に表現されているか。

④　読み手の日常生活や考え方が、どこかににじみ出ているか。

⑤　本との付き合い、本との出会い、本を手にしたときの喜びなど、本に対する読み手の心がにじみ出ているか。

⑥　読書生活が日常の中に溶けこんで、自然な姿で読書しているか。

⑦　文体や語彙を工夫しているか。

○　本の選択に無理はないか。

○　応募規定に合っているか。

審査の方法

一　事務局で作品規定に従い整理。応募票は切り離し、作品に学年・対象図書別に通し番号を記す。学校名や氏名は審査段階で明らかにしない。

二　第一次審査により、第二次審査対象作品を選考。その選考にあたっては、一作品二名以上の審査員により評価し、協議の上決定する。

三　第二次審査では、佳作以上の該当作品を小学校・中学校・高等学校別に審査。担当審査員の協議の上、決定する。

札幌市長賞

ラブカは静かに弓を持つ

札幌光星高等学校　三年　野崎　幸子

受験生の夏にして、進路の決まらない私。周りが次々とやりたいことを決めていく中取り残されていく焦燥感や不安。今更遅いという諦め。本を読むまでの自分は深い海の底を漂っているみたいだ。まるでラブカのように。

最初はスパイ活動から始めた音楽教室。二年たったら離れなければならないと最初から分かりきっていたことなのに、橘は講師の浅葉のみならず同じチェロ仲間とも交流を深めていく。スパイ活動に関係無い飲み会にまで参加してしまうのだ。関係が深まるにつれ、スパイという身分を隠すために小さな嘘を積み重ねていく橘。次第にどの自分が本当の自分かわからなくなっていた。

いったい本当の自分とは何だろう。私は考えた。過去の自分か、今の自分か。学校にいるときの自分か。家族と過ごす時の自分か。どれも私だが、相手に対して本音で話せているかと言われればそうではない。生活の中で様々な顔を使い分けてしまっている。そう考えると本当の自分はどこにもいないような気がする。橘もきっと同じだったはずだ。スパイとしての自分、チェロを楽しむ自分、浅葉を思って録音記録を消した自分。でも私はどの顔も自分だと思う。スパイ活動をしているからといって音楽教室での自分は決して嘘ではない。もっと自分の気持ちを信じてあげていいのだ。私は橘にそう言ってあげたいと思った。

「週に一回チェロを弾いてから家に帰ろう。それくらいの気持ちではじめたって全然いいんですよ。」という浅葉の言葉に胸がざわついた。受験生の今、私は大学受験は将来の生活と直結すると考えていた。給料が保証された安定した仕事が手に入るためにはどんな大学、学部がいいのかそればかりを考えて視野が狭くなっていた。でもそうじゃなくてもいいと浅葉に言われているようだった。自分が少しでも興味を持っていること、好きなこと、楽しいと思うこと。人生において大切なことは仕事以外にも沢山ある。そういうところに目を向けてチャレンジしてみてもいいのだ。些細なきっかけで始めたことでも、自分のやりたいことが見えてくるかもしれない。橘が浅葉や仲間と出会いチェロが弾きたいと心から思えた日が来るように。

浅葉に「まじめな話ここの間には壁があるだろう。」と言われた橘をみて、私と似ているなと思った。と、同時に私も周りの人からそう思われているのかと思いドキッとした。私もどちらかと言われれば橘のように人づきあいが得意ではない。橘が誘拐未遂事件から他人を怖いと思い始めたように、私にもきっかけがある。それは長年の友人との関係が拗れたことだ。私は今でもあの時言われた言葉を忘れられない。橘の経験と比べれば些細なことだが、そこから深い人間関係を送るのが苦手になった。いずれ壊れてしまうのなら最初から一線をおいて付き合えばいいと思い無意識に壁を作っていたからだ。でもそれは間違っていたことをこの本を読んで思った。私も橘も心のどこかで言い訳を探していたに過ぎない。人と人との繋がりは欠くことが出来ない。そして一度出来た絆や信頼は全てが無かったことにはならない。私も橘も、もっと人を信じてみていいのだ。浅葉が橘と周りにあった壁を突き破ってくれたのと同じ様にこの作品が私の壁も突き破ってくれた。

スパイ活動がばれてしまったのをきっかけに橘と周りの信頼関係は終わったかのように思えた。しかし、チェロ仲間であるかすみが言ったように、楽しかったあの時間は決して偽物ではなく、音楽教室で生まれた信頼や絆は確かにあった。アンサンブル当日、音楽教室に通っていた皆がチェロの響きによってそう伝えてくれた気がしてならない。失ったかのように思えた信頼関係は音楽教室の講師が言ったように、決して代替のきくものではなかったのだ。

橘は、誘拐未遂をきっかけに時が止まっていた。ラブカのようにずっと海底に溺れていた。しかし、アンサンブルの帰り道、鏡面になったシャッターに映りこんだ人間は確に大人で自分が思っていた程、脆弱な人間では無かった。橘はずっと大人だった。暗い海の底で自分の姿すら見えていなかったのだと思う。でも周りを信頼し深海で橘が鳴らしていた音はちゃんと浅葉の耳に届いた。浅葉と出会い、チェロ仲間に出会ったことによって深海から連れ出されたのだ。彼はもうラブカではない。本を読み終えた私はいったいそのシャッターにどう映るのだろうか。ラブカの姿から変われているのだろうか。

かすみが橘に助けられたように橘が浅葉に気づかされたように人と人の繋がりは必ず何かをもたらしてくれる。たまには、深海に潜ってもいい。でも自分の音を鳴らし、また繋がりを求めること。この作品に気づかされたように私も誰かに伝えたい。まずは鳴らす音に気づいてあげられる人になろう。

『ラブカは静かに弓を持つ』　安壇　美緒　著　集英社

札幌市議会議長賞

思い出は宝物

札幌市立北野台小学校　五年　森永　萌々夏

「悲しい時は、灰色の動物が側にいる。」

裏表紙のこのフレーズが目にとまりました。灰色の動物ってなんだろう？読んでいくと、人が抱える悲しみや憂うつな気分を例えて言っているらしいと分かってきました。この話は、深い悲しみの中にいた父さんの心から、灰色のゾウを追い出すため、主人公のオリーブが奮闘する物語です。

私は、オリーブが、どんよりした目でいつもうわの空の父さんを見ているのは、どんなにか辛く、寂しかっただろうと思いました。オリーブが、自分の辛い気持ちを、心の中にいる小犬を抱きしめることで、何とかやり過ごしていることが分かり、切ない気持ちになりました。「ゾウがいなくなりますように。」オリーブの切実な願いが、胸にせまってきました。

私の父も、仕事の悩みで、絶えずため息をつき、沈んでいることがありました。父にも灰色のゾウがつきまとっていたのです。私も父が元気になるように、コーヒーを入れてあげたり、四コマ漫画を描いて、笑わせたりしました。私は父のゾウを追い出すことができなかったけれど、オリーブはどうやって、父さんのゾウを追い出したのだろう。

オリーブはある朝、父さんを外に連れ出します。母さんとの思い出の曲をかけて、父さんとノリノリウキウキに踊ります。とうとう、父さんは笑い声をあげます。そして、割れて、かけらになっていた母さんの作った陶器のゾウの植木鉢に虹色の絵を描いて、花をかざります。父さんは、幸せだった思い出がたくさんあったことに気付きます。

父さんが元気になってほしいというオリーブの強い想い、母さんとの幸せだった思い出が、父さんの灰色のゾウを追い出すことに成功しました。ゾウがいなくなって、私は胸がいっぱいになりました。

思い出は宝物です。楽しい思い出だけではなく、悲しく辛い思い出も大切なものです。

私は幼少の頃、友達をつくるのに時間がかかりました。その頃の写真を見ると、遠足の時、寂しそうにしている私がいます。ちょっと悲しい思い出です。でも、親しい友達がいる今の私だったら、その頃の自分に「がんばっているね。」と言ってあげられます。また、これから新しい環境ですぐに友達ができなくても、悲しかった思い出が、「あせらないで。」と、背中を押して勇気づけてくれる気がします。悲しい思い出は、切ないけれど宝物です。

私は、灰色のゾウを家に入れたくないと初めは思っていました。でも、人は皆、灰色のゾウを抱えることがあるのだと思うようになりました。私もいつか、灰色のゾウを抱える時があるかもしれません。その時は、家族や友達、大切な思い出があれば、前へふみ出すことができると思います。

これから私は、様々な経験をしていくと思います。思い出が宝物となるように、すてきな経験をたくさん積んでいきたいと思います。

『父さんのゾウ』　ピーター・カーナバス　作　美馬　しょうこ　訳
文研出版

札幌市教育長賞

『ワタシゴト　14歳のひろしま』から平和維持を考える

札幌市立平岡緑中学校　一年　松本　萌杏

近年、太平洋戦争の体験者数が減少傾向にあると聞く。私たち戦争を知らない世代は、今後どのように平和な日本を受け継いでいくべきなのか。私自身が沖縄県にある『ひめゆり平和祈念資料館』を訪れた時のことと共に、『ワタシゴト　14歳のひろしま』から考えてみた。

日本で唯一、地上戦となったのは沖縄県だった。日本兵だけでなく、多くの民間人も亡くなった。その中には、看護要員として戦争に動員された、ひめゆり学徒隊の少女たちが含まれている。陸軍病院での過酷な労働を強いられた少女たちは、睡眠不足や空腹に耐えながら、負傷した兵隊たちのお世話を懸命に続けた。日本が戦争に勝って、再び平和な日本になると信じながら…。しかし戦況は悪化するばかりで、ついには非情な宣告が言い渡される。砲弾が飛び交う中での解散命令だ。病院となっていた壕の外に出されると、そこは戦地。武器を持たない民間人の彼女たちにどう生きよと言えたのか。彼女たちは、茂みや岩陰で砲弾から身を守るしかなかった。海岸へ追われ大波にのまれた少女、避けきれず砲弾に吹き飛ばされる少女、もう助からないと自決する少女、父母を呼び息絶える少女など、武器を持たない少女たちが非業の死を遂げさせられた。

彼女たちを悼み、平和祈念を込めて創設されたのが、ひめゆり平和祈念資料館だ。

入場してすぐ、少女たちの集合写真が目に入ってくる。胸が痛くなった。まっすぐと明るい未来を見据えている一人一人の笑顔が、そこにはあったから。勉強や部活動に励み、先生にこっそりあだ名までつけてしまう無邪気さも持ちながら、彼女たちは平穏な学校生活を送っていた。遺品として展示されている手鏡やハンカチ、ノート、女の子の絵が描かれたメモ帳などから10代の少女の日常が伝わってくる。楽しそうな少女たちの笑い声が聞こえてきそうで、つらくて悲しくて、涙が込み上げてきた。彼女たちはなぜ、戦争に巻き込まれなければならなかったのか。今と当時は違うことは分かっていても、思わずにいられなかった。動員されることを拒み、逃げてほしかったと。

さて、『ワタシゴト　14歳のひろしま』に登場するのは中学3年の修学旅行生である。彼らは太平洋戦争で原子爆弾が投下され、とても大きな被害を受けた広島県の平和祈念資料館を訪れる。グループ毎に、1年かけて一つの遺品について調べる。この事前学習により、戦時中の暮らしと共に、遺品の持ち主がどんな人物であったのかを知ることとなる。展示されている数々の遺品を流動的に見るのではない。その中から特に一つの遺品に焦点を絞り奪われてしまった一人の命の重さと向き合うのだ。

広島に原子爆弾が投下されたのは、1945年8月6日午前8時15分であった。青空の広がる晴れた日だったそうだ。多くの市民がありふれた日常の中にいた。町には市電が走り、通勤、通学をする人、見送る家族、それぞれの朝をいつも通りに迎えていた。その罪なき日常が一瞬にして奪われてしまった。せい惨な記憶、無念の想いが広島の遺品には感じられる。私は写真でしか見たことがないが、熱風により原形をとどめない三輪車や中身まで真っ黒に炭化したお弁当箱に、悲しみを覚えた。武器を持っていたわけではない、ごく普通の市民の命が軽んじられてしまったのだ。戦争はそれを許してしまうから、つらい。

作中の修学旅行生も私も、自分の置かれた環境の中で戦争を学んだ。『当たり前』の今の日本の平和を実感し、平和を受け継ぎたいと思っている。

しかしながら、平和について普段、何か考えているだろうか。非情で残酷だった戦争は今の日本には、もうない。日本の平和の中に身を委ね、日夜、戦争におびえることは決してない。だから、世界情勢を他人事と捉えてしまっていた。そんな自分に気がついた。

まだ世界には戦争をする国がある。国や家族を守るためにと、兵隊となって戦地へ向かう人がいる。その人たちが奪ってしまう多くの命は、罪なき市井の人たちだ。自宅に落ちたミサイルで負傷する人、学校を爆撃され亡くなる子どもたち。武器を持たない人たちが苦しみ悲しみを与えられている。かつて日本が太平洋戦争で経験したことが、今なお繰り返されようとしているのだ。

日本がもう戦争をしないと宣言をした時、未来を生きていく私たちに平和の継承が託された。今の日本の平和は、その願いのもとに成り立っているのだと感じる。

戦争体験者のお話や遺品から、当時の記憶を手渡す『渡し事』。戦争を知らない私たちは、平和に感謝し受け取ってきた。他人のことではない、私のこと『私事』として世界の国々が戦争への舵を切らぬよう、日本の過去と向き合いながら、平和を伝えていきたい。

『ワタシゴト　14歳のひろしま』　中澤　晶子　著　汐文社

札幌市学校図書館協議会会長賞

だいじないのち

札幌市立新川中央小学校　二年　山田　朝陽

いのちはどこにかえっていくんだろう。きょ年の夏にかっていたかぶと虫やくわがたは、なんか月かしたらうごかなくなって、家のうらのじめんに、シャベルでほってうめてあげた。あのかぶと虫たちは今ごろなにをしているんだろう。

たもんがつったイワナは、やかれて、たべられて、あたまと、ほねと、しっぽだけになった。そのイワナのいの中にも、ユスリカ、いも虫、オニチョロ、たくさんの小さな虫がいた。イワナや虫たちはどこへ行くのだろう。

ぼくはたべもののすききらいが多い。やさいは、にんじん、たまねぎ、じゃがいも、えだまめしかたべられない。くだものは、バナナしかすきじゃない。お肉はすきだけれど、魚はすきなのとすきじゃないのがある。一ばんすきなのは、ひもののちゃ色のところだ。お母さんは「すききらいはいいけど、一口はたべようね。」と言う。おちゃわんにごはんのつぶがのこっていると、「あつめて、あつめて、たべてね。」と言う。しょうじき「一口ちっちゃくたべるからゆるしてよ」と思うけれど、そういうときにお母さんの目はぼくをぎろっと見ている。

でもぼくがのこしたやさいはどうなるんだろう。すてられちゃうのかな。ごみになったらもうたべものじゃない。やさいにこころはないかもしれないけれど、やさいをつくった人のこころを思うと、やっぱりたべた方がよかったかなと思う。

たもんのお父さんは言う。「きっとイワナのたましいはかえっていくべ。」ぼくはそのことばを聞いて、たましいがまたイワナにもどってイワナとして生きかえってほしいなと思った。たましいはこころだ。こころがだいじにされなかったら、かなしい。ぼくも、これからは出されたものは、きれいにたべて、いのちをだいじに考えていきたい。

『いのちがかえっていくところ』　最上　一平　著　童心社

札幌市学校図書館協議会会長長賞

多角的にとらえることが世界をカラフルにする

藤女子中学校　二年　田中　結衣

「おめでとうございます！抽選にあたりました！」そんな事をプラプラに告げられた真を羨ましく思っていた自分が情けなくなった。人それぞれ違う色をもっているからこそ、成り立つ社会があり、この世の中を生きるにあたって、お互いの色を認め合う必要があると思った。

私は、この本を読むまで「死」に対してあまり重みを感じていなかった。それは、「自分の死」に対して実感が無く、自分事のように捉えていなかったからかもしれない。真は、そんな私に対して、決して間違った選択をしてはいけないことを伝えてくれたのだ。

この本に登場する小林真は、生きる意味が分からなくなり、「死」を選んでしまった中学三年生だ。真は、自分の先入観にとらわれすぎてしまった為に、現実を受け入れることができなくなったのだと思う。しかし、それは私にも共通して言えることだ。私は、「相手の顔色」や「他人の目」ばかりを気にしてしまい、無意識のうちに自分自身の行動や思考をストップさせてしまうことがある。自分の一番やりたいことがあったとしても、「みんながこれをやるなら、私もこれをやる」などと友達や周りに合わせてしまうことが当たり前になっていた。そんな時に出会ったのは、真の魂だった。短絡的な僕の魂が真の体にホームステイすることで、真は見失っていた大切なものを見つけ、「自分」を理解することができたのだ。真の魂のように、自分の先入観にとらわれず、常に多角的な視野をもつことが「自分らしさ」を存分に発揮することに繋がると思った。今までは、他者の目を気にして周りに合わせてばかりだった私だが、真の魂と出会ってからは、他者中心の集団行動を止め、自分という存在を誰かに認識してほしいと思うようになった。多様な社会になり始めた今、一人一人が自分のアイデンティティをしっかりと確立する必要があるのだ。

そんな多様な色合いの社会が成り立っているのは、それぞれが異なる個性や感性を持っているからであり、そんな社会では物事がスムーズに進まずお互いの意見が対立してしまう時がある。それは、決して悪いことではないが価値観の違いが生まれてしまった時に、他人の色を否定し、軽蔑することは「差別やいじめ」と同じだと考えるようになった。そもそも「差別やいじめ」は、自分の知識や感情だけで相手を表面的に判断してしまった結果であり、自分の視野の狭さに気付いていないことが原因なのではないだろうか。私も友達に「結衣ちゃんっておとなしいよね」と言われ、不服に思ったことがある。無意識であったとしても、自分の単なる思い込みによって「あなたはおとなしいはずだ。」などと相手のことを勝手に決めつけることは偏見にも繋がることであり、絶対にしてはいけないことだと思った。「何となく話しかけづらい」といった苦手意識を持つ根底には、その人の性格や行動に対する決めつけがあるからかもしれない。人間関係を築き上げるうえで大切なのは、どちらかが一方的になるのではなく、お互いの色を尊重し合い、信頼することなのだ。

しかし、残念なことに、「中高生が自殺した」というニュースを見かけることがある。それは、色と色同士がお互いに認めることも助け合うこともできず、自分の色を見失った際に起きてしまうことだ。私も「もし、誰かに生まれ変わることができたら……」などと自分の色が分からなくなってしまう時があった。そのような想像をしてしまうことは誰にでもありえることだがそれは、この世の中の現実から逃れるための最終手段である「死」と似ているようにも感じられる。誰かに生まれ変わりたい、と思ってしまうことは、真が選んでしまった「死」と同じように、この世界でたった一色だけの色を失うことに繋がるのだ。自分の色を見失った時には、一度立ち止まって家族や友達など身近な存在に目を向けることが自分を見つめ直すきっかけになるだろう。

この本を読み終えた時、私が持っている色はどんな色なのか疑問に思った。世の中には何もかも完璧にこなすロボットのような人は存在しない。同様に、ある人がどんなに情熱的だったとしても、すべてが赤色に染まった人など存在しないのだ、人間は、物事に対して真剣に考え、他者とお互いの価値観を分かり合い、尊重することができる生き物だ。誰一人として同じ色を持たず、一人の人間の中でも何百種類もの色が混ざり合ってできているからこそ、それぞれに「個性」が生まれるのだ。そんな私たちが社会を生きるためには、一人一人の色にスポットライトを当て、沢山の考えに触れる必要がある。まずは、自分の先入観を疑うことをはじめとし、固定観念にとらわれないことがカラフルな世界に足を踏み出す第一歩なのだ。私は、もっと自分の色に自信を持ち、多様な社会を自分らしく胸を張って自分らしく生きたい。

『カラフル』　森　絵都　著　　理論社

札幌市学校図書館協議会会長賞

「また、同じ夢を見ていた」を読んで

札幌聖心女子学院高等学校　三年　谷口　まる

これは、主人公の小柳奈ノ花という小学生が国語の授業の課題である、「幸せとは何か？」という問いの答えを見つけていく物語だ。奈ノ花にとって唯一友達と言える存在の人は南さん、アバズレさん、おばあちゃんの三人であり、この三人からもらうアドバイスを参考に奈ノ花なりの答えを見つけていくことになる。

そこで特に印象に残っているセリフが二つあるので紹介したい。まず一つ目は、「いいか、人生とは、自分で書いた物語だ。自分次第で、ハッピーエンドに書きかえられる。」という南さんのセリフだ。このセリフが今の私を励ましてくれているような気がした。学校に行くと昨年とは違い、受験生ならではの進路面談があったり、必死に授業を受けたり、友達と小テストの勉強をしたりすることが日常になった。家にいると、大学受験を控えている私に「勉強しなさい。」「大丈夫なの？」という両親からの言葉をいつも耳にする。妹も受験生のため、家ではいつもピリピリしているが、その様子を見て私も頑張ろうと思える良きライバルでもある存在だ。そして、一番辛い時期の今を頑張れば必ず、幸せなことが待っているという作者からのメッセージ性を感じた。人生とは、いつも幸せなことばかりではなく、辛いこともたくさんあるが、その壁を乗り越えて自分にとってハッピーエンドな道を歩んでいくことであるということに気がついた。そして「辛い」という文字に棒を一本足すと「幸せ」になるという言葉の意味を今、しっかりと理解できたように思う。

そして二つ目は、「幸せとは、誰かのことを真剣に考えられるということだ。」というアバズレさんのセリフだ。この言葉に出会う前の私にとっての「幸せ」は、自分が「幸せ」ならそれでいい、そう思っていた。しかし、この言葉に出会って、やはりこの考え方は間違っているということに気がつくことができた。人間は絶対に一人では生きていけない生き物だということを改めて感じた。そして、第一に家族や先生方、友人などたくさんの人に支えられているからこそ、今の私がいるということにも改めて気づかされた。今までの自分をふりかえってみると私自身、自分のことを考えてばかりいるときや、一人でいるときには、あまり「幸せ」を感じていないように思う。もちろん、一人で過ごす時間も大切だが、長期休みに久しぶりに友達と遊んだり、長電話をする時間もとても楽しいと感じる。この時間を過ごすことで、私は「幸せ」を感じているということに気づくきっかけとなった。さらに、この言葉は人間だけに限る話ではないと私は思う。動物にも「幸せ」を感じる瞬間はたくさんあるのではないだろうか。私は学校の授業で、保護犬・保護猫について学んでいるが、様々な企業に訪問させて頂き、保護犬・保護猫にとっての最終的な「幸せ」は新しい家族のもとで暮らすことだということを改めて感じた。保護犬・保護猫にとって心から「幸せ」を感じられるような人生をこれから歩んでいけるように、私達人間がサポートするべきだと思った。この授業は十月に終わってしまう。しかし、終わっても保護犬・保護猫のボランティアに参加したり、募金をしたりと高校生の私でもできることに積極的に取り組み、保護犬・保護猫の「幸せ」のために貢献し続けたいと思うきっかけとなり、よい機会になった。また、将来的には保護犬・保護猫を飼い、私の力で「幸せ」な人生を歩ませてあげたいと思う。

冒頭で述べた南さん、アバズレさん、おばあちゃんの三人は後に、奈ノ花の前から姿を消すようになる。直接的なことは書かれていなかったため、私なりの解釈になってしまうが、そもそもこの三人は歩む道を間違えてしまった未来の奈ノ花なのではないかと思われる。そして、奈ノ花の人生を本人が「幸せ」と心から思えるものにしてあげようと、国語の授業の課題である「幸せとは何か？」という問いに対してのアドバイスをしていたのではないかと考えた。つまり、歩む道を間違えた三人が奈ノ花のこれからの人生、同じ過ちを起こさぬようサポートしていたということになる。そして、奈ノ花にとっての「幸せ」を見つけることができたタイミングで、この三人は奈ノ花の前に二度と現れることはなくなったのではないかと思う。

この本は「人生」や「幸せ」をテーマに書かれており、受験生の私に背中を押してくれる本だった。「ハッピーエンドな人生を送りたい」「幸せになりたい」そう思うなら、今を乗り越えて「幸せ」を手に入れろ、という作者の力強いメッセージを感じた。受験まで残りわずかだが、最後の力を振り絞って頑張ってみようと思う。そして、一生に一度しかないこの人生を「幸せ」だったと胸を張って言えるように一生懸命生きようと思った。

『また、同じ夢を見ていた』　住野　よる　著　株式会社双葉社

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

とびきりの笑顔がみたいから

札幌市立厚別北小学校　三年　鈴木　快都

僕がこの本を読んでみようと思ったのは、僕のクラスにも外国から来た転校生がいるからだ。

この本は、引っ込み思案であがり症の蒼太のクラスに外国からの転校生エリサが来たことをきっかけに蒼太が変わっていく物語だ。

エリサは、日本語も上手に話せないし字も読めない。そんなエリサがカタコトの日本語で挨拶するとみんなに笑われてしまう。そのことをきっかけにみんなと口をきかなくなり、学校にも来なくなってしまう。蒼太は「さわらぬ神にたたりなし」と関わらない様にしていた。けど、隣の席のエリサをいつも気にしていた。そんな時に商店街の弟子入り体験で蒼太はエリサのお父さんのお店に行く。そこでは学校とは違いお客さんと話すエリサを見る。外国人だから、言葉が通じないからわからないと思っていたけれど会話って言葉だけじゃない、表情やジェスチャーも大切で何より相手を知ろうとすることが大事だと言うことに蒼太は気付く。いつもみけんにしわをよせていたエリサが蒼太と心を通わせたことで、「ワタシガッコいく！」と、とびきりの笑顔になるところが僕は一番大好きだ。

僕のクラスの友達は、二年生の時に外国から転校してきて、三年生で初めて同じクラスになった。エリサとちがって聞いたり話したりすることができる。だけど、漢字を書いたり、九九は少し苦手な様に思う。三年生の始めの頃、彼が発表している時、クスクス笑う声を聞いた。あの時、僕はすごく嫌な気持ちになった。きっと彼もエリサと同じ様な気持ちになったと思う。だけど、あの時僕は何も言えなかった。僕も蒼太と同じで、みんあの前で発表する時ドキドキするし、まちがったら恥ずかしいし、笑われたら嫌だなぁと思う。でも、蒼太が気付いた様に、僕のクラスにも『まちがってもても大丈夫だよ』という空気があれば今よりステキなクラスになるんじゃないかと思った。

次に僕ができる事は何かないかな？と考えた。彼は漢字が苦手そうだから、字を教えてあげるのはどうかな？でも、教えてほしいって思っているのかな？彼が好きなことは何かな？みんなで遊ぶのがきっと好きだから、たくさん声をかけるよう！だけどまずは、自分の仲良くしたい気持ちを伝える事が大事だなと思った。「わからないことがあったら聞いてね」と声をかけたり、失敗してまちがっても「大丈夫！大丈夫！」と言ってあげられる人に僕はなりたい！そしてエリサがとびきりの笑顔になった様に、彼にもいつも笑ってほしいと僕はこの本を読んで思った。

蒼太の担任の先生が「いいと思うことはどんどんやってみる。ダメだったらまた考えればいい」と言っていた。大切なのは、思っていることを行動する事だと僕は思った。だから、僕は夏休みが終わったら、彼といっぱい話をして彼の事を知りたい。そして僕も一緒にとびきりの笑顔になりたいと思う。

『はじめましてのダンネバード』　工藤　純子　著　　株式会社くもん出版

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞賞

将来の夢は何ですか？

藤女子中学校　二年　賀澤　聖菜

いつからか抱いていた私の夢は、「獣医」だった。明確な理由も無く。獣医師は犬や猫の病気を治し、飼い主もペットも笑顔にさせるのが仕事だと決めつけ疑わなかった。そんな職業が幼い自分の目には魔法使いのように映ったのだろうか。

この本の著者である齊藤さんは、犬でも猫でも兎でもなく、野生の、主に猛禽類の治療を専門とした獣医師である。時にタンチョウやカラスなども齊藤さんの研究所に運び込まれるという。

私が生活している中で関わる鳥類は、せいぜい元気に鳴いて飛び回っているカラスぐらいだ。ましてや息絶えた野生の鳥は見たことが無い。だから何が原因で運ばれてくるのか想像すら出来ず、疑問だった。

しかし、この本を読み終えた時にはその疑問もなくなり、そして同時に強いショックを覚えていた。

齊藤さんが治療する鳥の大半は、人間が原因で傷ついていたのだ。風車や列車との衝突、感電、鉛中毒。遥か昔には存在もしなかったであろう死亡理由がこの本には連なっていた。人間のせいで消えていった命は決して少なくはないであろう。それなのに私はこの事実に気付かないで十三年、周りの大人に見守られながら生きてきた。変わっていく環境を拒むことも出来ず、受け入れ、適応し、静かに消えていく命があることを知らなかった。

とは言ったが、今の私が知っても十三年しか生きていない未熟な子供は無力極まりない。だからより一層、命奪われる彼らを直接救える獣医になりたいという思いは強く、大きくなっていた。だが、その夢は諦めるしかない。私はそんな夢を抱いてはいけないのだ。

私は重度の動物アレルギーである。触れて温もりを感じることは勿論、容易に近づくことすら出来ない。幼い時は何ともなかったのに。やっと夢がはっきりと輪郭を描いたというのに。

そんな思いが心の中にずっとあった。最近は将来何になりたいか問われる場面が増えている。色々な本や沢山の人に出会って、様々な職業があることを知った。それでも私は動物に関わる仕事に就きたいと願うことを止められないようだ。

齊藤さんが診てきたという鳥の中で、私の考えを変えてくれた一羽がいる。それは感電事故に遭い、両脚とくちばしに重いやけどを負い、更には足指四本を失ったオジロワシだ。何の知識もない私からすると、生きている事が不思議な程の重傷だ。当然人の介護がなければ生きていけない、そう思っていた。だがこのオジロワシの生命力は私の予想を超えてくる。なんと自活能力を取り戻し、野に帰されたのである。

希望の光が無いとすぐ諦めてしまう私は、絶望的な状況からリハビリを経て野へ帰ったオジロワシを知った。この一羽は、救いようがない所まで落ちても、誰かの手を借りて上へ這い上がろうとすれば何とかなる、と気付かせてくれた。誰もが知っているかもしれないが、本当に「諦めない」というのは大切なんだな、と考えが変わった。

私はこのオジロワシのような、強い生命力に触れていたい。たとえ獣医ではなくても、直接関われなくても、違う答えはこれからゆっくりと探していくことにしようと思う。

少子高齢化、地球温暖化、戦争、食糧危機など挙げていくときりの無い社会問題は近年増えていくばかりだ。この本に関係している事といえば、野生希少種の絶滅や森林の減少などだろうか。一つ一つ問題になっているからには、何かが誰かが犠牲になっている。問題解決のために日々取り組みをしている人が沢山いるはずだが、一向に解決しないのが現実である。

よく、出来ることからやろうと世間は言うが、例えば傷ついた動物の為に私に何か出来ることはあるのだろうか？　遠い国で戦争に巻き込まれた人の為には、自分で稼いだ訳でもないお金を募金すること以外、力になれるだろうか？

私は何をすれば、どう生きていけば犠牲になる人を少しでも減らすことが出来るのだろう。なるからには世の役に立つ大人を目指したい、と私は思う。この本の著者である齊藤さんのように、自分が「今」出来ること、やるべきことをしっかりと見極められる人になりたい。

だがその道のりが、とても長く過酷なのは目に見えている。何度も何度も挫折し、諦めたくなるだろう。想像がつかない程の勉強量や苦しい出来事もあるだろう。もしかしたら本当に諦めてしまうかもしれない。そうならないように、辛くなった時にはこの本と、足指を失ったワシを何回でも思い出したい。

『野生の猛禽を診る』　齊藤　慶輔　著　　北海道新聞社

札幌市ＰＴＡ協議会会長賞

生きるということ―『夜と霧』を読んで―

札幌聖心女子学院高等学校　三年　西　恵里奈

「非ドイツ国民または占領軍に対する犯罪容疑者は、家族全員が強制収容所に送られ、一夜にして街から姿を消す。」これは、この本の題名にもなっている「夜と霧」命令のことを指し、当時のナチスによって構築された強制収容所の凄惨さを象徴する言葉として、よく用いられている。

著者であるＶ・Ｅ・フランクルは精神科医で心理学者であり、ユダヤ人であったために一九四二年に強制収容所に送られ、解放までの約三年間各地の収容所に移送されながら、過酷な強制労働を体験し、その人生を生き抜いた。その後、極限状態における人間の姿を心理学者として、そして「内部にいた者」として、自らの精神状態や心理状態とともにこの本に記している。

私は今まで、強制収容所をテーマにした本を何冊か読了してきたが、それらの作品とはまた違った生々しさ、残酷さ、醜悪さを感じた。毎日わずかな食事しかとれず、一日中体を酷使して、夜は狭い部屋で飢えや悲しみに耐えながら過ごす。そのうちに誰かの死体を見ること、誰かが死ぬこと、誰かが飢餓に苦しむこと、全てが「当たり前」と化し感情の動きを何一つ引き起こすことがなくなる。この「無感動」「無感覚」「無関心」からなる心理状態は、はたから見れば「厳しい環境により人間らしさが失われてしまった」ことになるが、私は、もしかしたらこの心理状態に陥らざるを得ない状況であったのかもしれないと考えた。自分で自分の人間らしさを洗脳・封印させ、慣れさせていかなければ、生き抜くことができない。そう思わせてしまうほど、精神的・・心理的に凄惨な状況下に置かれていたのではないかと思う。

この本では収容所の過酷な生活の実態とともに、フランクル自身の「生きる意味」や「人生」についての考えが記されている。「人生から何を我々はまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何を我々から期待しているかが問題なのである。」「人生は我々に毎日毎時問いを提出し、我々はその 問いに詮索や口先ではなくて、正しい行為によって応答しなければならない。」この二つは、私たちが読み進めていく中で特に心に残った箇所であり、フランクルが過酷な生活を通して行き着いた「生きる意味」に対する答えだと考える。彼はこの三年間、家族も財産もすべてを失い、自分一体だけがこの世界に何桁かの番号として残っている。しかし、今ある現状を嘆き「もう生きる意味がない」と決めつけるのではなく、人生は人によって、時によって変化するので、今の自分の立ち位置でその意味を一般的に述べることはできない。だからこそ、自分自身で道を選んで、人生から導き出された問いに答えていき、自分にしか歩めない人生を切り開いて行かなければならない。彼はそう考えたのだ。

この本を読み終えて、収容所の恐ろしさや戦争の怖さを再認識するとともに自分がいかに「生きる」ことの尊さを軽く見て、環境や状況によって都合よく自分の道を狭めていってしまっていたかに気がつかされた。私は正直なことを言うと、まだ自分の生きる意味を知ることができていない。しかし、それで良いと思う。「生」を選択し続けた先で、きっと初めて生きる意味を知ることができると思うからだ。フランクル自身も、苦しい毎日を送る中で、自分自身の「生」と向き合い、生きる希望を持ちながら必死に生き抜いた。また、解放された後に自身の家族が皆収容所で亡くなっていることを知らされたが、この「人間が人間ではなくなる」収容所の実態を少しでも多くの人に知ってほしいという平和への強い思い・未来への希望があったからこそ、自分自身のために、苦しみ死んでいった家族・仲間のために、そして未来を生きるであろう世界中の人々のためにこの本を出版したこと。そしてそのおかげで、今私はこの本を手に取ることができている。同じ日を過ごすことは決してない一回的の毎日をどう過ごすかという選択は、やがて自分がどう「生きる」のかに繋がると考える。そして、今までの自分の歩みが今を創り、未来へ続いていく。未来は自分だけのものではなく、沢山の人のあらゆる選択によって創り上げられていく。そして、未来がどうなっているのかは誰にもわからない。私たちは、毎日あらゆる選択によって生きる道が変わり、その度に未来も変化するが、「未来を創る」のも私たちだ。よりよい未来のために私たちはどう決断をし、選択していくか。私は、未来への道が行き止まりにならないように、悩み苦しみながらも、真剣に、丁寧に人生からの問いに答え、生きていきたい。

『夜と霧　ドイツ強制収容所の体験記録』　Ｖ・Ｅ・フランクル　著
霜山　徳爾　訳　みすず書房

北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞

誰もが生きる意味を理解せず、命の短さをなげくのでしょう

市立札幌啓北商業高等学校　二年　齋藤　千奈美

あなたにとって生きるとはどんな意味を持つのか。もしも自分が臓器提供のために生まれたとしたら、人より少ない人生をどのように生きるのか。カズオ・イシグロさんの『わたしを離さないで』は、生と死について考えさせられる作品である。

介護人をしているキャシー・Ｈは提供者の世話をしている。キャシーの親友のトミーとルースも提供者だった。彼らは提供者であると同時に、地球のどこかにいる人のクローンなのだ。提供のために大人になると手術を受け、体が弱くなってしまうため、長く生きることはできない。しかし、他の提供者から条件を満たせば提供の猶予がもらえるという噂を聞いた。それは二人の男女が愛し合い、それを証明することができれば提供を数年間先延ばしし、一緒に暮らせるというものだった。キャシーとルースは猶予をもらうために励むも、実現することはできなかった。猶予をもらえる方法は実際には無く、噂にすぎなかったのだった。そして三人は大人になり、数回の提供を終えたルースは弱り果てて亡くなり、トミーもしばらくして亡くなった。残されたキャシーは、提供先の生き延びた人々と提供をして亡くなってしまう自分たちの違いについて自問するのだった。

この本を読んで気になったところが二つある。一つ目は、二人の男女が愛し合い、それを証明できれば提供の猶予がもらえるというところだ。ここが気になった理由は、自分が何をしようと提供の日は来てしまうのにどうしてそこまでして少しでも長く生きたいと思うのか疑問に思ったからだ。しかしこれは、提供者はクローンであっても私達と同じように心を持つ人間で様々な感情を持ち、恋愛もするという作者から私たちへのメッセージなのだと私は感じた。

二つ目は、なぜ題名が『わたしを離さないで』という名前になったのかというところだ。インターネットで調べたところ、子供の頃にトミーがキャシーに渡したカセットに入っていた曲名の、「Never Let Me Go」の和訳と出てきた。しかし私が気になったのは、本でも映画でも題名になるほど印象に残るような場面には感じられなかったからだ。私はトミーとルースが亡くなってからキャシーが一人になってしまったため、私を置いて行かないでほしいという思いや、自分の体から摘出されてしまう臓器を切り離さないでほしいという意味がこもっていると考えた。

「誰もが生きる意味を理解せず、命の短さをなげくのでしょう。」これは、この本をもとに作られた映画でキャシーが言った最後のセリフである。このセリフを聞いて私は、はっとした。なぜかというと、私はキャシーの言ったセリフのように生きる意味など考えたことすらなく、過ぎゆく毎日を当たり前のように過ごしてきたからだ。しかし、生きる意味など無いという人もいる。それは生きることが当たり前で、明日があることを心のどこかで信じているからこそ、言えることだと私は思う。

ところで臓器提供に対する日本の現状はどうなのだろうか。日本臓器移植ネットワークの調べによると臓器提供したい人は三九・五％、したくない人は二四・三％、どちらともいえない人は三五・三％、無回答は〇・四％という結果になった。私はどちらともいえない人が半分以上を占めると思っていたため、提供したい人が一番多いという結果に驚いた。また、世界的に見ても日本の提供率が低い。ＮＨＫの調べによると「人口一〇〇万人あたりの臓器提供者数」はアメリカが四一・六％、スペインが四〇・八％、そして日本が〇・六二％という結果になった。日本の提供者数が少ない理由は、ドナーの数や提供施設数が少ないことがあげられる。そのため一人ひとりが臓器提供の意思表示をすることが大切である。意思表示をするためには、マイナンバーカードに記入したり、家族や友人など、周りの人に伝えることが必要である。

私は国語の『いのちは誰のものか』という授業で臓器移植について作文を書いたことがある。その時は臓器移植を積極的に進めていくべきだと考えていた。しかし私はこの本を読んで、臓器移植についての考え方が変わった。もちろん臓器移植を行うことで助かる命はたくさんあるため、積極的に行うことは大切だ。しかし、本人の意思を尊重することが一番大切だと私は思う。

これから私は、マイナンバーカードに臓器提供の意思表示を行い、周りの人にも意思表示をすることを進めていきたい。

この作品は、カズオ・イシグロさんの数ある作品の中でも人気のある代表作だ。二〇一〇年にはイギリスで映画化され、二〇一七年にはノーベル文学賞を受賞し、日本でも綾瀬はるかさん、三浦春馬さん、水川麻美さんによってドラマ化された。原作だけでなく映画やドラマもたくさんの人に見て欲しい作品だ。

『わたしを離さないで』　カズオ・イシグロ　著　土屋　政雄　訳　ハヤカワ文庫

光陽社賞

平和をつくるには

札幌市立西宮の沢小学校　六年　板倉　悠起

「信頼を得る」ということは想像を絶するほど難しい。哲先生はどうやって人々の信頼を得たのだろうか。それは、祖母からの「弱いものはすすんでかばうこと。人を差別しない。どんな小さなものの命も大切にしなくていけない」という教えや、尊敬する牧師さんから教わった「人を信頼すること」など、様々な人との出会いからなのだろう。

哲先生は、他国の人々に寄り添い、尊重し、色々な視点から物事を見ることで人々の信頼を得てきた。何をするにも必要不可欠だが、「信頼を得る」ということはそう簡単なことではない。私はサッカーチームのキャプテンをしている。チームのために一生懸命考えた練習メニューに文句をつけられたり、責められたりする。どうしたらみんなが納得するものを作れるだろうか。協力してもらえるようになるだろうか。思い悩んでいた。どうせ自分の気持ちなんて、分かってもらえないと投げやりな気持ちになることもあった。哲先生の生き方に触れ、まずは自分がみんなの気持ちに寄り添い、信頼してみようと心に誓った。

哲先生は足の病気の原因が靴にあると気が付けば、サンダルを作り、子どもたちの病気の原因が汚い水であると気が付けば井戸を掘った。飲料用水を確保できても、農業用水が足りないとなると用水路を作った。そして砂漠化した田畑を短時間でよみがえらせた。

哲先生は子どものころ、昆虫の世界を通して、「人は見ようとしたものしか見ない」と気付いた。医師であるにもかかわらず、これらの事を成し遂げたのは、このころの経験からなのだろう。理想を口にするのは簡単だ。しかしそれを現実にできる人間が果たしてどれほどいるだろうか。哲先生はそれを成し遂げた。しかも、ただ自分で作るだけではなく、古くから伝わる伝統的な物や、壊れても自分たちの手で直せるようなやり方にした。哲先生一人の力では到底成しえないことができたのは、哲先生が人々に寄り添い、信頼し、また哲先生も人々に信頼されたからではないか。

平和は生まれるものではなく、自分たちが生むものだ。私が思う平和とは、戦争がない事。暴力や差別がなく、明日があるということだ。哲先生は、その平和に一歩でも近づけるように、アフガニスタンの人々と努力したのだろう。もし今、用水路が無かったら、この瞬間も病気、空腹で日常を奪われている人が、沢山いたに違いない。しかし哲先生は用水路を作り平和をもたらした。

自分は哲先生のように、自分の命をかけてまで人々を助けられない。私が今できることは差別をしない。暴力をふるわない。いじめを目にしたら止めることだ。

私は、この本に出会い平和について今一度、考えさせられた。「一隅を照らす」哲先生は、本当にその言葉通りの人だ。自分が光となりみんなを照らす。私もこんな人を目指してこれからを生きていきたい。

『大地をうるおし　平和につくした医師　中村　哲物語』松島　恵利子　著
汐文社

キハラ賞

へいわとせんそう

藤女子中学校　一年　前田　海音

絵本の表紙、私をじっと見つめる顔に釘付けになった。どのページを見ても、まるでピクトグラムのように直接目と頭に働きかけてくる。平和と戦争、敵と味方。なぜ争うのか。ページをめくる手が、何度も止まる。

今年日本は終戦から七八年を迎える。昨年のウクライナ侵攻以降、どうやら日本という国で戦争が行われなくても私達の日常には大きな影響があることを体験的に知った。また、弾道ミサイルが発射されたことを伝えるアラートに怯えつつも、私達はその恐怖感さえ日常に溶け込ませようとしている。「戦争とは兵力による国家間の闘争である」という定義は理解している。しかし、この絵本はもっとわかりやすく「戦争とは何か」という私の疑問に答えてくれるのではないか。そんな期待でこの本を手に取った。

吸い込まれそうな漆黒のページをめくると、少し光を放つ白のページが始まる。見開きの左には、へいわのぼく、右にせんそうのぼく、が描かれている。へいわ、の方には笑顔の少年。せんそう、の方の少年は辛そうな様子だ。同じ人やものなどが平和と戦争ではどのように変わるのか、対比しながら本は進む。

すると突然唯一の写真が登場する。「せんそうのくも」。原爆や核実験による「きのこぐも」の写真だ。抽象化された絵本の中に一気に戦争の手触りが加わる。そう、戦争は物語の世界の話ではなく、現実だ。ページいっぱいに広がるキノコ雲の写真が、シンプルで柔らかなタッチの絵の中に突如現れるからこそ、その恐ろしさが強く印象に残る。

終盤は「てき」と「みかた」の比較に移る。描かれている「てき」と「みかた」の絵は、一見同じだ。しかしよく見ると、口の大きさ、髪型や服装などが少しずつ違う。人は、見聞きするものを意識せずとも取捨選択しており、自分には関係ないと判断すると「同じ」だと処理してしまうことを思い出した。自分の中の「戦争への無関心」を突きつけられ、頭を殴られたような衝撃を受けた。私達はそれぞれが唯一無二の存在である。お互いの「違い」を認められず、尊重されない状態の成り行きとして、争いは生まれるのかもしれない。

戦争とは何だろう。答えを見つけられないまま、私は小一と小四の従兄弟にこの本を読み聞かせしてみた。彼らは「どうして木は枯れてるの」「どうして家族は消えたの」「どうして敵も味方も同じ顔なの」などと矢継ぎ早に私に問いかけた。私は彼らの質問にどう答えようかと悩みながら、ハッと気づいた。そうか。行き場のない「どうして」が積み重なる状態が「戦争」なのだ。

人間の当たり前の生活を奪うものが戦争で、そこから生まれる悲しみや怒りは受け入れられる場所もなくたゆたう。それなのに人間は侵略と戦争、殺戮や略奪を繰り返してきた。なぜ戦争は起こり、終わらないのか。その答えを出すのは簡単ではない。しかし、遠い国で起きている戦争だとしても、そこにいるのは「自分と似た、愛おしい日常を生きる別の誰か」だということをこの絵本は教えてくれた。また、この絵本の見開きのように、平和と戦争は隣り合わせという危うい均衡の元にあることを、谷川さんとNoritakeさんは私達に伝えたかったのではないだろうか。

谷川さんはインタビューで「本来は平和であることが当たり前で、後から戦争が侵入してくるのだ」と仰っていた。銃声や戦闘機の音にかき消されてしまうような悲しい「どうして」がこれ以上増えないように、「戦争とは、平和とは何か」と一人一人が考えるきっかけをこの絵本は与えてくれた。関心をもつこと。対話をすること。心を寄せること。それが戦争を無くすヒントであり、平和を願う私たちの力になる。そしてこの絵本の余白を埋めるように自分なりの「どうして」の答えを紡ぎ出すことが、私たちの責務だ。

ユネスコ憲章は「戦争は人の心で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなくてはならない」としている。平和の砦とは、友達を作り、隣にいる人を愛し、そんな個人的なことを積み上げることで作られるのだと思う。絵本の終盤、谷川さんとNoritakeさんが私達に見せてくれた大切な希望がある。見開きいっぱいの朝。すやすやと眠る赤ちゃん。味方も敵も、皆同じように美しく、同じように愛されて、同じように幸せでありますようにと祈らずにはいられない絵と文。私は谷川さんの「朝のリレー」という詩を思い出した。誰かが送った朝を、誰かがしっかりと受け止める。赤ちゃんが安らかに眠れる夜と、希望の朝が訪れる世界を平和と呼ぶのだろう。戦争でさえ奪えない「生きる希望」が確かにそこにある。戦争のない世の中を思うことは、目の前の命に思いを馳せることだ。誰もが笑顔で生きることが当たり前に叶えられる世界を私たちが築かなくてはならない。そのためにこの答えのない絵本を、何度でも手に取ろう。

『へいわとせんそう』　谷川　俊太郎　文　Noritake　絵　ブロンズ新社

教育出版賞

小松菜はてき

札幌市立日新小学校　三年　小林　初心

私は、野菜がきらいです。だから、給食では、食べる前に少なくしてもらったりのこしたりします。とくに小松菜のサラダは、私のてきです。

この本を読んで、私が食べたくないてきにも色々な人のチェックと、作ぎょうの後に、目の前に出てきていることを知りました。

私が考える調理のスタートは、小松菜をあらうことです。でもじっさいはちがって、調理員さんは、安全な給食を作るために身じたくや体調けんさをしないと、小松菜にはさわれません。そんな手間がかかった小松菜でも私は好きにはなれません。てきはてきのままです。小松菜を見ただけで、のどがキュンとしまります。私は、調理員さんを悲しませると思います。

絵本の中では、八人の調理員で四百五十人分の給食を作ります。

四百五十÷八＝五十六あまり二

一人で五十六人分になります。わり算習ってよかったです。一人で五十六人分なんて私にはとてもできません。作ぎょうをさぼったり休けいばっかりしたら時間どおりできないと思います。

本のこんだては、カレーライスで、私の大好きなメニューです。カレーライスには、たくさんの野菜が、入っています。その中でも、にんじんは、三つにわかれたながしで三回もあらいます。家では一回だけです。読みすすめると、大きななべで、カレーができあがっていくのでここまでにおいがとどいてくるようでした。料理が出来あがったら、安全のために、温どもはかって、中まで火が通っているかたしかめていました。この作ぎょうは家ではやりません。

私が本で一番おどろいたのは、料理が出きあがった後の作ぎょうです。作った物は全ぶ五十グラム二週間れいとうほぞんすることです。なぜなら万が一食ちゅうどくなどがおこった時に調べるためです。私たちが給食を食べておなかをこわさないために調理員さんは、家ではやらないような、面倒なことをしてくれています。

もしも今私がおなかをこわしたら、アイスの食べすぎか、ジュースののみすぎかとげんいんを考えます。家で食べた物ではなかったら学校で食べた給食をうたがうかもしれません。そんな時れいとうほぞんした五十グラムで、調理員さんが悪くないことをしょうめいしてくれるのだと思います。そう思うと毎日出された給食は、私を守ってくれていることに気がつきました。それなのにきらいな小松菜をてきのままにしていいのでしょうか。

すぐに小松菜みたいな野菜を好きになる自信はありません。それでものこしたりへらしたりする時は、調理員さんたちに、もうしわけない気持ちをもちたいと思います。そして私なりに工夫しながら、きらいな食べ物をへらしていくど力をします。

『給食室のいちにち』　大塚　菜生　著　少年写真新聞社

北海教育評論社賞

声なき慟哭

北嶺高等学校　一年　前田　海杜

「むかし　むかし…ほんとうは　そういいたい　でも　ちっとも　むかしむかしに　ならない」

「ピカドン」を体験した「カタリベ」たちの言葉に、その姿に、僕の喉は小石が詰まったようになった。言葉が出てこない。ページをめくる指が重くなる。戦争は終わっていない。

この本に登場するのは広島県の平和記念資料館の地下に収蔵されている約二万一千点の中からの十四点の「もの」、すなわち歯を食いしばって生きた人たちのよすがである。それらのかすれた声にじっと耳を傾け、言葉にしたのはアメリカ生まれの詩人、アーサー・ビナード。「もの」はいつしか「カタリベ」となった。アーサー氏の眼差しは鋭いながらも暖かく地獄の底を照らす。写真家の岡倉氏が捉えた陰影は、残され者たちを受け止める「講院石」の白く冷たい静けさと相まって「カタリベ」の雄弁さを引き立たせる。両方揃った小さめの軍手、中のご飯は焦げてしまった弁当箱、色鮮やかなワンピース、八時十五分で止まった時計。彼らは広島で体験したあの瞬間のことを語る。そして今も大切な人のことを「さがしている」のだ。

この本に登場するのは「もの」だけだ。ずっと一緒にいるはずだった持ち主を思っている「カタリベ」。確かにこのメガネをかけた人が、この鉄瓶の持ち手に触った人がいた。その時の一瞬前まで、ささやかな日常があったことを僕に語りかける。また、巻末にはカタリベたちのプロフィールとして持ち主やその家族の物語が収められている。原爆被災者は数字ではなく、それぞれの譲れない物語があることを痛感する。またカタリベたちの声はそのまま大切な人を失った誰かの心の声だということがわかる。これだけの言葉をカタリベから引き出すにはどれだけの精神的困難と努力があっただろう。アーサー氏が祖国アメリカの学校教育で教わったのは「原爆の正当性と必要性」だったからだ。しかし、彼は日本に来て「ピカドン」という実体験を端的に示した言葉と出会う。「この言葉のレンズが僕に新しい視点を与えてくれた。同時に「ピカドン」に相当する英語が存在しないことにも気づいて、課題を背負った思いがした。」というあとがきを読み、僕も日本人として背負うべき課題を「さがす」ことを決意した。

世界がウクライナ侵略、大量破壊兵器の使用リスクの高まりという未曾有の危機に直面している中、今年五月に行われたＧ７サミットでは、武力侵略も核兵器による脅かしも国際秩序の転覆の試みも断固拒否するという意思を示した。しかし、核は「安定不安定パラドックス」という恐怖の均衡を生み出しており、結果戦争の形態は複数併存している。人間が核を捨てていない以上、その愚かさを冷静に受け入れていくしかないのだろうか。なぜなら僕達はそれ以外に戦争を抑止する方法を未だ持たないからだ。相手を脅すことで平和を守るという非常に残酷で残念な国際政治の現実がある。核なき世界、を単なるスローガンに終わらせることなく本当に実現させるためには、「平和を祈る」ことだけでは一歩にできない現実がある。

写真の一枚一枚を見ながら詩を読んでいる時、僕はこれまで学んだ歴史や戦争や原子爆弾に関する情報を頭の中にオーバーラップさせていた。たくさんの「なぜ」「どうして」「何のために」が渦巻く。カタリベの言葉は僕に傍観者でいることを許さない。歴史を学ぶことは目を背けたくなるような殺し合いが今後も起こり得るという現実について考えるきっかけになる。これまでずっと戦争を繰り返してきた人間の本質はそう簡単には変わらない。その現実に謙虚に向き合わなくてはならないと思った。戦場としての世界なんて見たくない。しかし、戦争はこれからもきっと起こる。その上で起こらないようにできる方法を考える。これが平和を考える出発点だろう。そして今僕達に突きつけられているのは現実的な脅威だ。だとすれば感情論から歴史を振り返った冷静な思考への切り替えをしよう。そうして一人のささやかな抵抗が他の誰かの勇気を誘い、何かを止める力になるだろう。安易な妥協が積もり積もって音もなく戦争が始まるのだとしたら、諦めるなよ、というシンプルな想いが、何かを変えるかもしれない。僕達の平和が脆いバランスの上に成り立っているのだとしても、カタリベから受け取った悲しみや怒りを忘れない限り、強い気持ちでギリギリのところで立ち続けたい。

僕は、カタリベから、「ピカドン」への向き合い方をさがし続けるバトンを受け取った。失ったものを、「喪った」と人が受け入れるには途方もない時間がかかる。そしてその終焉に救いはないが、祈りはある。僕は戦争から目を背けない。同情心や被害者意識に浸かることもしない。忘れてはいけないものに、この本は僕を繋いでくれた。いかに当事者として感じ続けられるか。僕はそこに挑む。

『さがしています』アーサー・ビナード　著　岡倉　禎志　写真　童心社

図書館ネットワークサービス賞

「ぼくは、ぼく」

札幌市立平岡公園小学校　二年　井川　眞宏

「それでいい」という言葉が目にとびこんできて、この本を手にとりました。全部いいと言われているみたいでうれしくなりました。この本には絵をかくのが大すきなきつねが出てきます。ぼくもかきたくなって、すぐにすきなおもちゃの絵をかきました。ぼくは、字を書くのは苦手だけれど、絵をかくのは大すきです。字は形がきまっているけれど、絵は何もきまっていないところがすきです。かんせいしたぼくの絵を見て、お母さんは「すごくだいじにかいたんだね」と言いました。上手って言ってほしかったけれど、絵は心のスケッチブックだから、上手とか下手はかんけいないと教えてくれました。

やまねこに絵をばかにされて、きつねがかわいそうでした。きつねをわらわないでって思ってドキドキしました。へたくそって言われたみたいでぼくも悲しくなりました。ぼくも絵をわらわれたことがあります。ぼくは、生まれつき体のきん力が弱くて、まっすぐ立つのもつかれます。二才の時からりょういくに通って体の使い方の練習をしてきましたが一番大へんなのは、字を書くことと、しせいをよくすることです。あひるが「がんばってじょうずにかいて」ときつねに言った時、ぼくもきつねといっしょに体中があつくなりました。友だちから見てちゃんとしていなくても、ぼくはいつもがんばっています。友だちにちゅういされると、もっとがんばらなきゃいけないのかなと、なきたい気もちになることもあります。だから、うさぎが「それがいい！きつねちゃんのえ、だいすき。」と言ってくれて心がぽかぽかしました。

僕は二年生になって、もっときん力をつけるために水えいを習い始めました。とても楽しくて絵と同じくらいすきになりました。これからも新しいことにちょうせんして、すきなことをたくさん見つけてつづけていきたいです。苦手なことも多く、ゆっくりだけどぼくは、ぼく。だから「それで、いい！」

『それで、いい！』　礒　みゆき　作　はた　こうしろう　絵　ポプラ社

図書館ネットワークサービス賞

「エーミールと探偵たち」から学んだこと

札幌市立向陵中学校　二年　鷹見　友貴

私は小学生のとき、冬休みに読む本として『エーミールと探偵たち』という本を図書室で借りた。なんとなく借りただけだったが、読んだ兄がおもしろいと言うので私も読んでみると、シンプルな内容でありながらワクワクが止まらず、短期間で読み切ってしまった。この本は一九二八年に書かれた小説で、出版されてからすぐに大人気になったそうだ。

この物語はドイツが舞台になっていて、主人公はエーミールという少年だ。実科学校（中等教育学校）の生徒エーミールはベルリンにいるおばあさんに会うため列車に乗るが、大切なお金（百四十マルク）を見知らぬ人に盗まれてしまう。そこでエーミールはベルリンで出会った新しい仲間たちとともに、どろぼうをつかまえるため、行動を開始する。

この本の作者の、ドイツのエーリッヒ・ケストナーは、一八九九年に生まれた。そのため二度の世界大戦を経験しており、その期間中、様々なものが彼を幾度となく悩ませた。第一次世界大戦では軍隊に招集された。また、ドイツをナチス政権が支配したときには彼はナチスにとって好ましくない人物だったため、彼の本が燃やされたり、執筆活動を禁止されたりしたそうだ。普通ならくじけてしまってもおかしくない状況だが、それでも彼は本を書き続けた。

そんなケストナーの困難が『エーミールと探偵たち』に現れている気がする。

例えば、エーミールがどろぼうをこっそり追っている場面に次のような文がある。「どろぼうが満足して、盗られたほうがつらい思いをするなんてむかつく、とエーミールは思ったが、どうしようもない。」ここではおそらく、ケストナーは自分をエーミールに、戦争をどろぼうに当てはめたのだと思う。つまり、どろぼうがエーミールを悩ませているのと同じく、戦争が彼を悩ませた、というわけだ。また、ケストナーはこの部分で「自分は間違ったことをしていないのに苦しまなければいけないのは、おかしい」と主張し、かといって自分ではどうしようもない、という嘆きが垣間見える。さらに、彼の別の本には、こんな文もある。「世界の歴史には、かしこくない人びとが勇気をもち、かしこい人びとが臆病だった時代がいくらもあった。これは正しいことではなかった。」過去の過ちを指摘するとともに、彼がこれを書いた時代の社会の危機を記し、なんとか間違いに気付いてほしいという思いが伝わってくる。

彼がこれほどまでに自分のことを書いているのは、身の回りで起きている惨事を知らせて、現在と未来に向けて、「状況を改善するには、見て見ぬフリをしないで、全員が行動しなければならない。」と警告を発したかったのだと、私は思う。

では、今の世界は、ケストナーが望んでいた世界になっているだろうか。今、ロシアとウクライナの間で戦争が起こっている。大変な事故が毎日のように起き、世界の物流には大きな打撃を与え、現在は常に不安に包まれている。数十年前、ケストナーが経験したのと同じようなことが、今まさに起こっていて、終戦の見通しは立っていない。彼が本を通して発してくれた警告を、素通りしてはいけない。そのためには、まず、戦争のことを遠くで起きていることで済まさずに何が起こっているのかを知ることが重要だと思う。それを知っているのと知らないのとでは全く違うし、急な出来事にも落ち着いて対処できるので、何が起こっているのか自分で調べるようにして、常に深いところを知っておくようにしたい。特に私は、テレビやラジオ以外では情報を得ていないことが多いので、これからは何事も自分で知るようにしようと思う。

さらに『エーミールと探偵たち』を読んで、何かを変えたければ、待つのではなく自分が動かなければ何も変わることはない、と感じた。エーミールは一時も諦めずにどろぼうを追い続けた。ケストナーは、社会が正しい方向に向くよう願いながら、世間に睨まれる危険を顧みず、本を書き続けた。結果がどうなるかはともかく、自分が動かなければ、自分が望んでいる展開になるチャンスは低いと思った。振り返ってみると、私は「こうなれば良いな」と思ったとき、自分から動き出すことを躊躇し、他の人が動くまで待つ、という場面がたくさんあったと感じた。それでは決して自分の思い通りになるはずがなく、せっかくのチャンスも逃してしまう。人生は一度しかない。後戻りはできないので、自分が後悔しないような人生にするため、変えたいことは自分で変えていくようにしたいと思う。

『エーミールと探偵たち』エーリッヒ・ケストナー　著
池田　香代子　訳　岩波書店

光村図書出版賞

これからの決意

札幌市立信濃中学校　二年　坂本　温音

「今の私」の心の中を描いたなら。その絵はきっとにごっていてぐちゃぐちゃだ。それは自分にとって全く必要無いものだ。そう思っていた。

背景は純色の黄色。なのに服の黒い部分からは混色がみえている。アンバランスさに惹かれてこの本を開いた。本を閉じ、背表紙を見つめた私の胸には一つの決意があった。

二〇二〇年、中学三年生の鈴音と千暁、二人の友人、文菜と健斗はコロナ禍を手探りで必死に生きていく。何事にも一直線でつき進むバレー部の鈴音と、慎重かつ冷静な美術部の千暁。私は不器用で一生懸命な中学生達を汗ばみながら見守り、自分を重ねていた。

「やりたくないんだったら、やめれば？」

学級代表、ピアノのコンクール、検定、勉強。何でもやりたがるくせに、全部中途半端な私に母のクリティカルヒットがとんでくる。今日までで何回言われただろう。でも私はやり遂げたいし、母の言いなりにはなりたくなくて、その日だけは努力する。

そんな私は、千暁が抱える葛藤に共感する部分が多くあった。千暁はどんなときも純色の明るい色彩で絵を描いてきた。五年前の台風で一時期表情まで失ったお母さんを励ますためだ。誰かのために描く千暁と自分にために、しかし誰かに言われて動く私は違いそうでどこか似ているような気がして、少し苦しかった。「嘘の絵」ばかり描いてきたことを千暁は悔いるが、私はその絵は良い事もたくさん生んだと思う。沈んでいたお母さんは千暁が描いた鮮やかなたんぽぽを原動力にして一歩を踏み出せたのではないだろうか。そして、千暁にとっても汚れのない絵を描く時間は心の支えとして大切なものだったと思う。

千暁は感情を爆発させる鈴音の姿を、真っ黒に塗りつぶしたパネルから削りだしていく。本の題名でもある「スクラッチ」とよばれる技法だ。無我夢中の千暁は、まるで数ヶ月前の私のようだった。ただひたすら、自分のしたいようにする。周りのことなんて、目に入らないのだ。私は今思えば嵐のような約一ヶ月間を思い出した。

新しいクラスにもなじみ、楽しみな宿泊学習が待っていたがその先には英検、定期テスト、ピアノのコンクールを控えていた私。浮かれてなどいられなかった。今までになく、大事なものが敷き詰められた状況に緊張しながらも、全部達成してやる、と意気込んでいた。一泊二日の旅が終わると、寝不足ながらもピアノのレッスンへ直行した。英検は四日後、テストは九日後、コンクールは十日後。休んでなんかいられない、やれ、頑張るんだ、私。毎日唱え続けた。「大好きなシリーズの新刊を読みたい。」とか「話題の動画を見てみたい。」そんな雑念は寄せつけなかった。結果、信じられないくらい、全て良い成績をだすことができた。後に家族に聞いた話では、あの頃の私は目がぎらぎらしていたそうだ。

しかし今の私には、その『獲物を捕まえ』るような勢いが全く無い。母にいくら言われてもすぐ元に戻ってしまう自分がやるせない。『それならいっそ真っ黒に塗りつぶせ』

千暁の言葉が脳裏に蘇る。強情で他人に弱いところを見せまいとする私が心の中で描いているのは笑顔できれいな私だ。それこそ『嘘の絵』だ。千暁みたいに次の絵のために再利用したいけれど、そんなこと私は恥ずかしくてできない。今までのものは、捨てよう。

コロナウィルスは私達の生活を一変させた。「もう無理ー。」とマスクを外す友達を避け、自己嫌悪に陥ったり、鈴音のように周りの人はコロナに向き合っているのに自分だけ変わっていない焦りを覚えたこともあった。全部コロナが無ければ解決したし、今となってはいらないものだ。千暁はそんな日々をどう描くだろう。また『スクラッチ』をするための、下の絵として描くのだろうか。

ふとした瞬間、気づいた。コロナの時代はいらないものではない。スクラッチの下の絵は無くてはならないのだ。最後の印象的な場面を思い出す。大雨の中、二人が叫びながら自転車を走らせたみたいに条件がどうであれ今を輝かせることはできるんだ。それならば。

だらけていた自分は心の片隅にとっておこう。いつか、今だ、と思ったときに全部真っ黒にして自分を削りだしたい。そのときまで、私というパネルに様々な自分を描いておく。「良い絵」にはこだわらなくしようと思う。たとえ「今の私」がにごっていてぐちゃぐちゃであっても有りのままのものを描いてみたい。私を味わい深いものにしてくれるはずだ。

この表紙に描かれたスクラッチの線は色も太さも並びも人物によって違う。でもどれも美しい。作者がこの絵で伝えたいのは、自分を大切にして前を向いていけば、必ずあなたの色がでてくるというメッセージだと思う。

私は、私に「削りだしたい」と思わせられる自分を目指して、今をあがいて、もがいて、一歩一歩、前進していく。強く心に誓った。

『スクラッチ』　歌代　朔　著　あかね書房

佳　作

◇小学校の部　低学年

自由	ぎょうざのひをよんで	札幌市立新川中央小学校	１年	北島　奏歩
自由	わたしがまほうをつかえたら	札幌市立桑園小学校	１年	木村　笑理
課題	まちをささえるひとたち	札幌市立桑園小学校	１年	加藤　愛依里
課題	みんなをささえるお父さん	札幌市立北園小学校	１年	佐藤　なつみ
課題	自分の絵でいい	札幌市立みどり小学校	１年	相馬　和人
課題	よるにうまれたわたし	札幌市立発寒南小学校	１年	早川　咲希
課題	あきらちゃんのことはあきらちゃんがきめていいんだ！	札幌市立北九条小学校	１年	三島　晶
指定	けんかのたねとなかなおりのたね	札幌市立美香保小学校	１年	田中　寿怜
自由	大じなことば	札幌市立緑丘小学校	２年	汲田　旬
自由	ステキなひいおばあちゃん	札幌市立新琴似南小学校	２年	山本　柚希
課題	よるにはたらくってすごい！	札幌市立大谷地小学校	２年	粕川　夏生
課題	私の知らない夜の世かい	札幌市立新琴似北小学校	２年	加藤　悠
課題	わたしの知らない夜のせかい	札幌市立二条小学校	２年	坂本　結
課題	きつねは、ぼくだ。	札幌市立大谷地小学校	２年	豊沢　咲仁

◇小学校の部　中学年

課題	残さず食べよう給食	札幌市立西宮の沢小学校	３年	板倉　未来
課題	給食の本当のすがた	札幌市立伏古小学校	３年	小関　隼人
自由	なりたい自分地図	札幌市立緑丘小学校	４年	汲田　琴
自由	『戦争の恐怖』	札幌市立真栄小学校	４年	長谷川　璃乃
課題	興味をもつと世界が広がる	札幌市立北野台小学校	４年	駒田　塔旭
課題	小さな親切	札幌市立平岸高台小学校	４年	林　和慶
課題	給食は健康へのエール	札幌市立真栄小学校	４年	和田　美怜

◇小学校の部　高学年

自由	一番強い魔法	札幌市立開成小学校	５年	小野　芽衣子
自由	人間とカラス	札幌市立新陽小学校	５年	佐々木　天夢
自由	「先生しゅくだいわすれました」を読んで	札幌市立真栄小学校	５年	佐々木　蓮
自由	料理はみんなを笑顔にできる	札幌市立新陽小学校	５年	早坂　凪優
自由	十才の私が感じる世界	札幌市立簾舞小学校	５年	バーン　アルバ優花
自由	「チギータ！」を読んで	札幌市立北陽小学校	５年	前田　咲紀
課題	愛と真心は世界を救う	札幌市立厚別北小学校	５年	佐々木　正明
課題	いつか明るい未来を見たい	札幌市立平岸高台小学校	５年	藤井　雄大
指定	好きなことのために	札幌市立桑園小学校	５年	迎里　咲綺
自由	がんばるの形	札幌市立南小学校	６年	赤岡　希海
自由	言葉の怖さ、勇気の大切さ	札幌市立本通小学校	６年	松原　葵子
指定	障がい者に心を寄せて	札幌市立桑園小学校	６年	秋田谷　咲乃
指定	たぶんみんなはしらないことを読んで	札幌市立幌南小学校	６年	工藤　大雅
指定	戦争の身近さ	札幌市立白楊小学校	６年	呉　詩楽

◇中学校の部

自由	「ハリネズミの願い」を読んで	札幌市立向陵中学校	１年	野瀬　天斗
課題	ほんとうの楽しさって何だろう	札幌市立向陵中学校	１年	岩﨑　華
課題	人生取扱説明書	札幌市立向陵中学校	１年	辻村　珠菜
指定	マスクと黒板	札幌市立向陵中学校	１年	中道　優奈

◇高等学校の部　　該当者なし

優　良　賞

◇小学校の部　低学年

自由	おとうさんがかえってくるひ	札幌市立桑園小学校	１年	遠藤　彩夏
課題	あえないけれど、ありがとう	札幌市立北園小学校	１年	佐藤　有紀
課題	きつねはわたし、うさぎはおかあさん	札幌市立明園小学校	１年	山崎　史果
指定	ぼくのおはなしきにいったかい？	札幌市立西野第二小学校	１年	坂本　悠真
自由	わたしもがまんする	札幌市立桑園小学校	２年	和佐　薫
課題	うさぎがたくさん	札幌市立白楊小学校	２年	杉森　葵
指定	『いのちがかえっていくところ』を読んで	札幌市立清田南小学校	２年	田島　敬仁
指定	がっこうにまにあわないを読んで	札幌市立桑園小学校	２年	玉田　鈴都

◇小学校の部　中学年

自由	戦争と平和	札幌市立北九条小学校	３年	島谷　藍乃介
自由	ひとつのゆう気、わたしのゆう気	札幌市立桑園小学校	３年	長崎　祐里香
自由	三平方メートルの世界でを読んで	札幌市立桑園小学校	３年	渡瀬　夏子
課題	「今日も給食をおいしくいただきます」	札幌市立発寒南小学校	３年	早川　凌太朗
課題	どうしてる？未来の自分	札幌市立明園小学校	３年	山崎　穂夏
自由	「わたしの苦手なあの子」を読んで	札幌市立円山小学校	４年	於保　かなさ
自由	ハナミズキのみちにこめられた想い	札幌市立真栄小学校	４年	サムソノー　織美愛
課題	みんなの中にも神さまがいる	札幌市立南月寒小学校	４年	田之岡　湊斗

◇小学校の部　高学年

自由	願いをかなえる日記ゼロページ目	札幌市立大谷地小学校	５年	佐藤　奏和
課題	真の勝者になるために	札幌市立桑園小学校	５年	木村　暉
課題	「中村哲物語」を読んで	札幌市立桑園小学校	５年	宮崎　爽
指定	「ももちゃんのピアノ」を読んで	札幌市立美香保小学校	５年	田中　絢萌
自由	『犬たちをおくる日』を読んで	札幌市立発寒小学校	６年	安住　匠永
自由	「苦手を克服」その先にあるもの	札幌市立新光小学校	６年	佐藤　美和
自由	おばあちゃんが残してくれた言葉	札幌市立北野台小学校	６年	中川　華
課題	アディが私にくれたもの	札幌市立大谷地小学校	６年	原田　陽菜

◇中学校の部

自由	大人になるということ	札幌市立羊丘中学校	1年	引田　明里
自由	頼る事の大切さ	藤女子中学校	1年	山田　玲衣

◇高等学校の部

自由	「こころ」に入り込む	市立札幌啓北商業高等学校	１年	井崎　柚
自由	自分の好きを仕事にする	市立札幌啓北商業高等学校	１年	小杉　実乃梨
自由	「夜と霧」を読んで～自分は人生から問われている存在～	札幌聖心女子学院高等学校	３年	関根　凛子

第６９回　札幌市読書感想文コンクール
入　賞　者　一　覧

令和５年度

札幌市長賞	札幌光星高等学校３年	野崎　幸子	課題　ラブカは静かに弓を持つ
札幌市議会議長賞	札幌市立北野台小学校５年	森永　萌々夏	指定　思い出は宝物
札幌市教育長賞	札幌市立平岡緑中学校１年	松本　萌杏	自由　『ワタシゴト　14歳のひろしま』から平和維持を考える
札幌市学校図書館協議会会長賞１	札幌聖心女子学院高等学校３年	谷口　まる	自由　「また、同じ夢を見ていた」を読んで
札幌市学校図書館協議会会長賞２	札幌市立新川中央小学校２年	山田　朝陽	指定　だいじないのち
札幌市学校図書館協議会会長賞３	藤女子中学校２年	田中　結衣	自由　多角的にとらえることが世界をカラフルにする
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞１	札幌聖心女子学院高等学校３年	西　恵里奈	自由　生きるということ―『夜と霧』を読んで―
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞２	札幌市立厚別北小学校３年	鈴木　快都	指定　とびきりの笑顔がみたいから
札幌市ＰＴＡ協議会会長賞３	藤女子中学校２年	賀澤　聖菜	自由　「将来の夢は何ですか？」
北海道高等学校ＰＴＡ連合会石狩支部長賞	市立札幌啓北商業高等学校２年	齋藤　千奈美	自由　誰もが生きる意味を理解せず、命の短さをなげくのでしょう
光陽社賞	札幌市立西宮の沢小学校６年	板倉　悠起	課題　平和をつくるには
キハラ賞	藤女子中学校１年	前田　海音	自由　へいわとせんそう
教育出版賞	札幌市立日新小学校３年	小林　初心	課題　小松菜はてき
北海教育評論社賞	北嶺高等学校１年	前田　海杜	自由　声なき慟哭
図書館ネットワークサービス賞１	札幌市立平岡公園小学校２年	井川　眞宏	課題　ぼくは、ぼく
図書館ネットワークサービス賞２	札幌市立向陵中学校２年	鷹見　友貴	自由　「エーミールと探偵たち」から学んだこと
光村図書出版賞	札幌市立信濃中学校２年	坂本　温音	課題　これからの決意

学校賞

毎日新聞社賞　藤女子中学校